

周防 柳

The Butterfly and the Bomb

Suo Yanagi

青

い

蝶

八

月

の



集英社

八月の青い蝶



周防 柳

The Butterfly and the Bomb
Suo Yanagi

集英社

周 防 柳 (すおう やなぎ)

1964年東京都生まれ。早稲田大学第一文学部卒業後、
編集者・ライターに。「八月の青い蝶」(「翅と虫ピン」改題)で
第26回小説すばる新人賞を受賞。

はらがつ
あお
ちよう
八月の青い蝶

二〇一四年二月一〇日 第一刷発行

著 者 周防柳 (すおう やなぎ)

発行者 加藤潤

発行所 株式会社集英社

〒一〇一八〇五〇 東京都千代田区一ツ橋一五一一〇

電話 〇三三三三〇一六一〇〇 (編集部)

〇三三三三〇一六三九三 (販売部)

〇三三三三〇一六〇八〇 (読者係)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社ブックアート

©2014 Yanagi Suo. Printed in Japan ISBN978-4-08-771547-7 C0093
定価はカバーに表示してあります。

盗本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁(本のページ順序の間違いや抜け落し)の場合
はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。送料は小
社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。
本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは、法律で認められた場合を除き、著作
権の侵害となります。また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、いかなる場
合でも一切認められませんので、ご注意ください。

一章	標本	2010年8月	007
二章	動員	1945年8月	033
三章	初恋	1945年8月	071
四章	証明書	2010年8月	151
五章	脱皮	1945年8月	213
六章	飛翔	2010年8月	257



目次

一章	標本	2010年8月	007
二章	動員	1945年8月	033
三章	初恋	1945年8月	071
四章	証明書	2010年8月	151
五章	脱皮	1945年8月	213
六章	飛翔	2010年8月	257



目次

装
丁
高
柳
雅
人

八月の青い蝶

わしはずつと八月を、

くり返してきたんじゃ。

一
章
標
本

2
0
1
0
年
8
月

亮輔^{りやうすけ}の帰宅に備えて、多江子^{たえこ}ときみ子は数日らしい準備に追われていた。

さきおとといは内装業者がやってきて、彼の病室となる奥の八畳間をフローリングに替えていった。おとといは福祉用具のレンタル会社の人に来て、電動リクライニングやら食事用のテーブルやら機能のたくさんついたベッドを組み立てていった。きのうの午前には工務店の人がやってきて、縁側から車いすのまま庭に出られる鋼鉄製のリフトを取りつけていった。午後にはレンタルの酸素発生装置とか、ポータブルの便器とか、つきそい用のフォールディングチェアとかが運びこまれ、そのたびに二人してああでもない、こうでもない、レイアウトの思案にくれた。

そうしてすっかり様変わりした部屋を虚心に眺めてみれば、そこは寝室として使ったことがなかっただけに大きなきだし窓にカーテンがついておらず、夜は雨戸を閉めるからよいとしても、さんさんと注ぎこむ昼間の日差しは衰弱した病人の目にはどう考えても強すぎた。そこであわててホームセンターに軽を走らせ、淡い緑色のカーテンを買い、やれやれと取りつけてみればこんどは丈が長すぎて十センチも床をひきずる不首尾で、また大あわてで縫い目をほどき、ミシンを引っぱりだしてようやく縫いおえたのが、深夜の三時だった。

そんなことでけさは二人とも寝不足の疲れが^お澱^りのようにたまっていたのだが、亮輔のことが予定断を許さぬし、午前十時には病室支度の最後のおおものであるエアコンの取りつけが来る予定だ

ったから、あと二時間ほど寝ていたいところを我慢して、「えらいねえ」と言いながら八時過ぎには無理して起きた。

そうして寝間着のまま二人して食べたくもないトーストと紙パックのアイスコーヒーの朝食をとっていたらば、九時には早くもピンポンが鳴り、当惑しつつ応じてみればやっぱりエアコンの人びとだった。とんちんかんなほど律儀なくせに時間を守るといふ語彙だけは持ちあわせておらぬ、地方都市のふしぎな常識に生きている衆であつた。

東京のホテルに勤務しているきみ子は、父の末期のために無理してすこし長い休暇を取り、三日前に広島県の西端にある〇というこの町に里帰りしたのだが、都会ぐらしが長いだけにあらためて信じられぬ思いのするわがふるさとの習慣であつた。

あと二週間で七十八歳になるきみ子の父熊谷亮輔は、急性骨髄性白血病だつた。発病してすでに一年半がたち、推定余命の期限はとくに過ぎていた。希望なら自宅療養に切り替えてもよいと担当医師から妻の多江子に話があつたのが一週間前で、多江子は亮輔に希望を訊き、その答えをいれて退院することになったのだつた。

2

悪びれもせぬ〇市時間の人びとは、ねじりはちまきにニッカーボッカーの親方と、段ボールやらドリルやらを腕いっぱい抱えた高校を卒業したばかりの二人で、朝いちばんだというのにす

でに玉の汗で、それだけで室内の温度がムツと二度も昇ったようだった。

きみ子は微妙に距離を取りながら彼らを現場である奥の八畳間にいざなったが、そこへ行くためにどうしても狭い廊下を通り抜けねばならず、壁にいたずらな汚れをつけまいとするためだろう、二人がかりで荷物を運ぶ彼らはおかしな蟹歩きで、無理な体勢を続けるためますます汗がふき出し、目的地にすべての道具を運びおえたときには肩のあたりから湯気が立ちのぼりそうだった。白いTシャツは濡れて透き通り、はちきれんばかりの筋骨に貼りついていた。

きみ子は彼らとしばらく作業の段取りを打ちあわせたが、その間じゅうなんとなく目のやり場に困り、その心持ちの半分は奇妙な照れが混じっているのに気づいてめんくらった。目の前にある労働者の肉体は恐ろしいほどの鮮度に映り、そういうものに気圧けおされるのはまさに自分が腐りかけているからにはかならずぬと思った。じつさい自分は賞味期限の切れた四十女であった。

そんな依頼主の感傷などどこ吹く風で、話が終わると若い二人は元氣よく頭を下げ、「はいじや始めさしてもらいますけ」と、今日いちばんの仕事に取りかかり、きみ子は思わず知らず川中島のようなところに取り残されてしまった。

たかが家電の一つや二つと思っていたのに、始めてみればそれほど簡単なことではなく、壁に穴をあけて排水管を通したり、電源を引っぱってきて専用のコンセントを作ったり、室外機を設

置したりと、あんがいな大工事であるらしかった。

きみ子はよく働く工兵たちをしばらく眺めるともなく眺めていたが、甲高いドリルの響きにきりもみされているうちに先ほどまで胸を覆っていた憂鬱はいつしか霧消し、また目慣れてしまえば若い肉体もことさらな脅威でもなく、そうなれば、いまの自分が劣化とか老化とかに敏感になりがちなのはなべて父のことに起因する気の病であり、彼への死の宣告いらい、いつしかもろともに出死のみちゆきをしている気分になってしまっただけだと思った。そう思ったらすんと憑きものが落ちた。

きみ子はむかしからちよつとしたことでおかしなところへ精神が迷いこむのに、いざとなるといきなり樂觀に転じる能天気さも持ちあわせており、そういうところは父親によく似ていた。

——病気なのは父さんであつて、あたしが死ぬわけじゃない。

そうなれば、ほんやり仕事を眺めていても時間の無駄であつた。

きみ子は盛大な騒音に負けぬように、

「じゃ、おまかせします。なんかあつたら呼んでください」

と、叫んだ。やや動きがとれるほうのひとりか脚立の上から上体をねじつて、にこつ、と健康な歯並びを返した。

そのきれいな口もとを見たら、自分ももちつと、ましにしてこようという気になった。気づいてみれば、上は幼稚な柄の古いTシャツ、下はサッカー地のパジャマのズボンという起きたままのなりで、顔も洗わず、歯も磨いていなかった。妙な妄想に走る前にまずは当たり前前に身づくろい

だ。

と、苦笑いしつつ、ふと、あれ母さんはどこへいった？ と母の姿を求めると、多江子は工事のためにベッドにかぶせた汚れよけのカバーの死角にいた。そちらの隅の壁には仏壇があつて、彼女はそこにすがるような脱力したようなていで座りこんでいた。その姿を見たらきみ子とは、胸を突かれ、去ろうとしていた足を思わず止めた。

4

その仏壇——というのは、もともと亮輔の生家にあつた幅が一間もあるりっぱなもので、築百年以上になるその家で独りぐらししていたしゅうとめ 姑の福子ふくこが五年前に九十七歳で大往生したとき、亮輔が救出してきた代物だつた。

亮輔の生家は広島市の南部の元安川もとやすがわの河口に近い三保町みほまちというところにあつて、あの原爆にも生き残つたたくましい家だつた。多江子と亮輔夫婦も結婚した当初は姑とともにそこに住んでいたのだが、二年後にきみ子が生まれたのをしおにこの〇市に家を建て、親子三人で移ってきた。そのころ亮輔は会社勤めをやめ、瀬戸内の沿岸工場地帯であるこの市でちいさな事業を始めていたのだ。

〇は福子の里で、新居の土地は彼女の実家に伝わる田畑の一部を譲りうけたものだった。しかし、うわものは自腹であり、事業を始めたばかりだったから余裕もなく、つつましい普請だった。

その後たしように増改築はしたものの基本的には建てたときのままで、そのたいして広くもない家に亮輔が思いきり場所をとる父祖伝来の仏壇を運びこんだので、多江子はおおいにむくれた。困るわ、こんなもん、部屋が狭せまうなってしまうじゃない——。多江子はがんらい合理的なたちで、神様だとか仏様だとかいうものが大きらいであった。しかし、亮輔はひとりっ子で他にそれを受けつぐ者もいなかったから、否も応もなくいれざるをえなかった。

そんなこともあつて多江子の仏壇に対する反発は最初から大きかったのだが、その後彼女の嫌悪感はさらに増した。というのも、夫のそれへの入れこみが尋常でなかったからだ。花や線香を欠かさないのもちろん、毎日ほこりを払い、位牌をつやぶきで息かけて磨き、お茶をいれてはいそいそと供し、ご飯を炊けばいちばんにてんこ盛りしてお供えした。そのうえに、どこで覚えてきたのか、正しいのか間違っているのかわからぬ般若心経まで毎朝朗々と唱えるようになった。もともと亮輔は冠婚葬祭のたぐいをおろそかにせず、法事やお彼岸の供養などは人並み以上にねんごろにやるほうだった。けれども、まさか読経までやるひととは多江子は思っていなかった。だから、あつけにとられた。おつとめにいそしんでいる亮輔は妙にじじむさく、新興宗教の信者のようだった。何十年も連れそっていながら自分は見誤っていたのかもしれないと多江子は思った。これまでなにひとつといっているいいほど夫に不満を感じたことはなかったのに、いまになって見そくなった気分であった。

多江子と亮輔は仲のよい夫婦だった。まわりにもそう言われたし、自分でもそう思っていた。だから、夫に幻滅を感じたということじたい、多江子はくやしかった。まれにみるいい夫婦だっ